

# A Cognitive Linguistic Approach to Evidentiality - A Case of Evidential -rasi-i in Japanese -

メタデータ	言語: English 出版者: 公開日: 2021-07-13 キーワード: 作成者: 高島, 彬, TAKASHIMA, Akira メールアドレス: 所属: 金沢大学
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/00063360">http://hdl.handle.net/2297/00063360</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 学位論文要旨

Dissertation Abstract

学位請求論文題名 Dissertation Title

A Cognitive Linguistic Approach to Evidentiality

- A Case of Evidential *-rasi-i* in Japanese -

(和訳または英訳) Japanese or English Translation

証拠性についての認知言語学的考察

— 日本語の証拠性「らしい」を例に —

人間社会環境学 専攻 (Division)

氏名 (Name) 高島 彬

主任指導教員氏名 (Primary Supervisor) 堀田 優子

(注) 学位論文要旨の表紙

Note: This is the cover page of the dissertation abstract.

# A Cognitive Linguistic Approach to Evidentiality

## - A Case of Evidential *-rasi-i* in Japanese-

### <Abstract>

This paper focuses on a cyclical process, especially our conception of reality, which consists of the repeated collapse and reconstruction of our mental universe caused by our embodied interactions. This cyclical process resides in “evidentiality” as a linguistic category. Evidentiality represents the source of information concerning the proposition presented by utterances (cf. Aikhenvald 2004). Specifically, I mainly focus on the Japanese evidential marker, *-rasi-i* and investigate the following three issues related to evidentiality.

- I. What motivates the language change of the evidential *-rasi-i* from the suffixal usage of *-rasi-i*?
- II. What is the difference between evidentiality and epistemic modality?
- III. Why does the mirativity meaning arise when the evidential *-rasi-i* is combined with first-person pronouns?

Various CG theories, including by Langacker (2008), have been constructed based on English studies, which lack any grammatical evidential markers and supplement the meaning with lexical items if required. To analyze evidentiality from the perspective of CG, we must examine whether the theoretical frameworks can be applied to the analysis of evidentiality. If not, then we need to improve them with a new approach. In this paper, I primarily adhere to the CG frameworks, and where necessary, produce my framework needed to analyze evidentiality by incorporating findings from Philosophy and Psychology.

### [要旨]

本論文では、通言語的に認められている「証拠性 (Evidentiality)」を認知言語学の観点から考察し、証拠性に反映される認知プロセスについて論じる。証拠性とは「情報源 (Source of Information)」を表す言語的カテゴリーであり、日本語では、証拠性のモダリティ「ようだ／らしい／そうだ」が推論や伝聞を表す文法要素として確立しているが、英語では、語彙的要素 (例: 知覚動詞 (e.g. see, sound)、副詞句 (e.g. apparently) など) によって証拠性の意味が補われる。認知言語学では、言語には我々人間が世界を捉える一般的認知能力が反映されていることを明らかにしてきた。しかし、その理論は主に英語の分析を中心に構築されているところが多く、英語にはない言語的カテゴリーに対しては、既存の理論的枠組みが適用可能かどうかを検証し、必要であれば修正を加える必要がある。本論文では、証拠性「らしい」を例にとり、その言語変化、日本語と英語の比較対照、そしてミラティブへの拡張という3つの論点を設定し、認知言語学の枠組みが日本語の証拠性「らしい」にも援用可能かどうかを検証した。

まず、本論文の2章では、通言語的な証拠性に関する先行研究を概観し、日本語の証拠性「ら

しい」を例にとり、以下に示す3つの点を論じる必要があることを示した。

- ① 日本語の証拠性標識「らしい」の言語変化の経路とその動機づけについて考察する。
- ② 日本語の証拠性の標識とそれに対応する英語の表現について比較対照研究を行う。特に、日本語の証拠性「らしい」が用いられるところで、英語では証拠性に関する情報が全くの無標で示される点に注目し、日本語と英語の事態把握の差異について論じる。
- ③ 日本語の証拠性「らしい」が一人称主語と共起する時に発生する意味をミラティブ (Mirativity) として捉え、そのような意味が発生する認知的動機について論じる。

本論文の立場としては、この3つの論点を説明する枠組みとして、従来の認知言語学の理論を踏襲しながらも、以下に示す認知プロセスを提案した。この認知プロセスは、日々の「体験」によって自らが持つ既存の概念を変容し、再構築していく過程を示したものである。

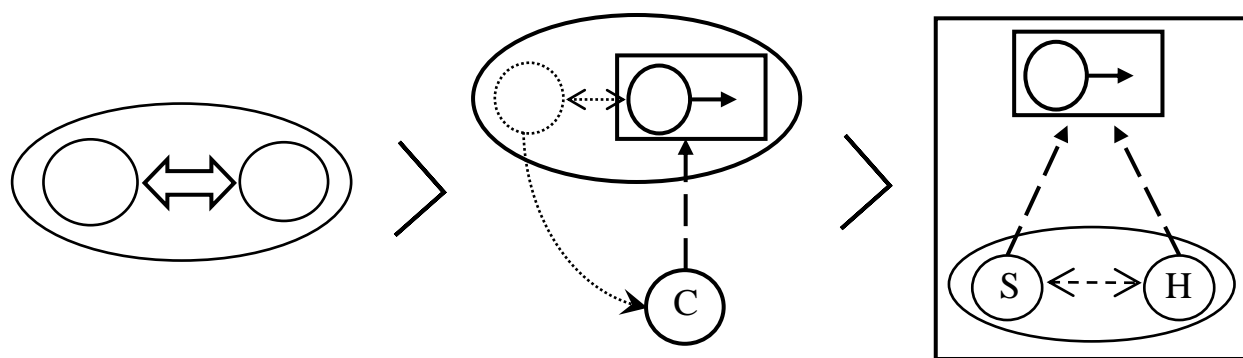


Figure. The Cycle of Awakening

この図は、左図に示すような日常生活における体験から、その日常的慣習にズレが生じた際に、これまで当然と思っていた世界を改めて捉えなおすことで、自己の概念世界を再構築するプロセスである。そのようにして再構築された概念世界は他者と共有されることによって、新たな当然の常識として定着していく（右図）。このサイクルにおいて、中図に示す、当然と思っていた概念世界の崩壊とそれを再構築する段階は、当該の事態がリアルのことかどうか不安定になる段階を示している。証拠性に反映される認知プロセスとは、このような自己の概念世界の崩壊と再構築の過程にあると主張した。

論点①に関しては4章にて、通言語的な証拠性の文法化現象と比較すると、日本語の証拠性「らしい」の言語変化は特殊なケースであることを指摘したうえで、証拠性「らしい」の言語変化がどのようにして成立したのかについて論じた。以下に示すように、現代日本語の「らしい」には形容詞を構成する接尾辞の用法と証拠性標識の用法がある。

- |                                |      |
|--------------------------------|------|
| (1) a. 彼は、とても男らしい。             | [典型] |
| b. 田中の部屋の電灯が消えている。どうやら寝ているらしい。 | [推量] |
| c. 知人の話では、あの店は経営者が変わったらしい。     | [伝聞] |

日本語の証拠性「らしい」の言語変化の特徴は、以下に示すように形容詞を構成する接尾辞から発達したということにある。

Table. The language change of the evidential *-rasi-i* in Japanese

	Late Middle (12c-16c)	Early Modern (17c-18c)	Modern (1860-)
Grammatical Category	Suffix		Evidential marker
Meaning	Typicality / Similarity		INFR / HS
Construction	[X - <i>rasi-i</i> ]	> [[noun phrase]- <i>rasi-i</i> ]	> [[finite clause]- <i>rasi-i</i> ]

この証拠性「らしい」の構造と意味の変化を包括的に記述するためには、2つの点を明らかにする必要がある。1つ目は、形容詞を構成する接尾辞「らしい」は前接部に名詞相当の語句を取るが、証拠性の標識になると前接部に定形節を取るようになる変化である。この変化の要因として、「らしい」の前接部に名詞を取る構文において、[Aは[X]らしい]という構造が[[AはX]らしい]というように異分析(rebracketing)が生じたことによる。そして、この異分析を動機づけるのが、「知識」としての情報を表していたものが、「体験」した対象をカテゴリー化する判断の作用へと変化することにある。以下に示すように、接尾辞「らしい」は一般的な典型的属性を表すという点で、多くの人にとってアクセス可能な「知識」よりの情報であるといえる。その一方、証拠性が示すのは、情報取得からの推論であるため、個人的な体験に依拠した「体験」よりの情報であるといえる (cf. 定延 2006)。

- (2) しきたりに反しても正しいことをおし通すのが**若者らしい意見**と「大人」は言うに違いない。
- (3) 「少々、お待ち下さい」と言って、巫女は走っていく。しばらくして**神主らしい男**が出て来た。

「典型」を表す(2)の「若者らしい」における「若者」とは、世間一般の人がアクセスしやすい「若者」のプロトタイプを表す。一方、証拠性「らしい」を伴う(3)「神主らしい」における「神主」は、その場にいる認知主体が持つ印象であり、実際「神主」がどうかはわからない対象から「神主らしさ」を感じるために、「[その男は神主]らしい」と判断しているのである。ここで「当該の対象が神主である」という命題にアクセスできるのはその場にいる認知主体のみであるため、「体験」的であるといえる

2つ目として、証拠性「らしい」の「推量」と「伝聞」の意味への変化である。以下に示すように、「推量」は仮定の帰結節では用いられないのに対して、「伝聞」の読みでは容認可能となる。証拠性「らしい」は仮定や条件に基づく推論ではなく、現象を説明するアブダクションに基づく推論を表すため、仮定を表す従属節の後ろでは使うことが出来ない。しかし、伝聞の場合、話し手の推論ではなく、[太郎は[もし明日雨が降ったら運動会は中止になる]と思っている]という階層を成すことで容認可能となる。

- (4) もし明日雨が降ったら、運動会は中止になるらしい。 [??推量]  
 (5) 太郎の話では、[もし明日雨が降ったら運動会は中止になる]らしい。

この階層の差異は命題の判断者の差異と関連している。以下に示すように、「推量」は証拠に基づく話し手の判断を表すため、推量した命題についてその判断を疑うことはできないが、「伝聞」では他者から聞いた命題を表すため、話し手がその判断について疑うことができる。

- (6) a. ??足音がする。誰かが部屋に入ってきたらしいが、私はそう思わない。 [推量]  
 b. 先生の話では、太郎は風邪で欠席らしいが、私はそう思わない。 [伝聞]

つまり、「推量」から「伝聞」の発生は発話内容に話し手とは異なる概念化者が発生することによるものである。接尾辞レベルから証拠性の「推量」の発生は、典型性という「情報」から「体験」に基づく判断への変化であったが、ここでも話し手が判断者、つまり概念化者として概念化されることが言語変化の要因になっているといえる。したがって、証拠性「らしい」の言語変化は発話内容に反映される概念化者の数が増える方向へと変化しているのである。

このように「らしい」の言語変化は、意味の変化と平行して、前接部にどのような要素をとるかという構文としての変化も生じるところに特徴がある。接尾辞から助動詞へと変遷する「らしい」は、証拠性の意味を獲得するのと並行して、意味的・統語的スコープを名詞から節へと拡張していき、伝聞の発生においても他者の判断を伴った定形節へとスコープの拡張が生じている。このような言語変化を記述するためには、人間の動的な概念構築の側面を導入する必要があり、従来の主客対峙の構図を前提とするLangacker (1990)の指摘した「主体化」だけでなく、中村(2016)の指摘する「脱主体化」を必要とする。つまり、証拠性の発生は、新奇な状況において既存の概念を拡張し、適用するという人間の認知プロセスを反映しているとした。

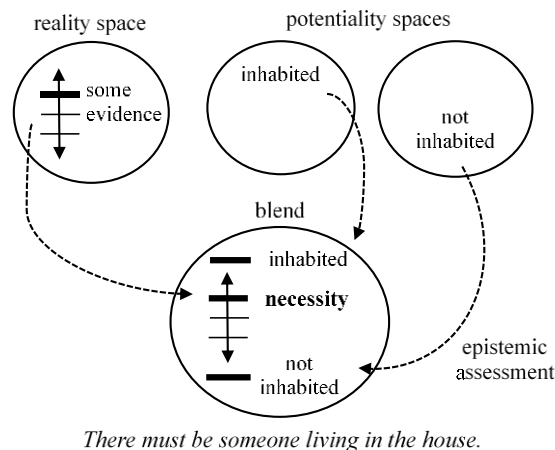
論点②に関しては、証拠性と認識的モダリティの関係についての先行研究を整理し、両者が人間の判断をする際に相補的に働く二つの側面である可能性を示唆した上で、5章において、同様の事態を描写する際に、リアリティ判断が言語間での事態把握の差異として現れることを示した。これまで証拠性と認識的モダリティについて、以下の4つの立場が指摘されている。

#### (7) Positions on epistemic modality and evidentiality

- a. evidentiality is part of epistemic modality  
(Palmer 1986)
- b. evidentiality and epistemic modality are part of a larger domain.  
(Palmer 2001, the larger domain is called *propositional modality*)
- c. evidentiality and epistemic modality partially overlap  
(van der Auwera and Plungian 1998, the area of overlap is inferentiality)
- d. evidentiality and epistemic modality are separate domains  
(De Haan 1999, Aikhenvald 2004[8])

(De haan 2010: 106)

Radden and Dirvan(2007)では、以下に示すように、認識的判断は①リアリティ・スペース（誰かが住んでる痕跡を見つける）と②肯定的見込み(人が住んでいるという見込み)、③否定的見込み（人が住んで居ないという見込み）という3つメンタル・スペースから構成されるとしている。



(Radden and Dirvan 2007:235)

Figure. Blending in epistemic assessment

認識的判断がこのようなブレンディングによって成り立つとすると、判断の根拠を表す証拠性は認識的判断の一側面であるといえる。そして、認識的モダリティと証拠性は、ブレンディングされた認識的判断（図中、下の円）に重きを置くのか、その根拠となるリアリティ・スペース（図中左上の円）に重きを置くのかの違いということになる。言語相対仮説を考慮に入れると、同じ状況であっても言語が異なれば、異なる側面を焦点化する可能性が予測される。実際、そのような差異が認められるのであるが、問題はこの焦点化の違いは何に起因するのかということである。

5章では、このような前提のもと、本論文では、日本語と英語の小説における証拠性の表出を調査した。その結果、以下に示すように、日本語で証拠性を有標化する状況において、英語では言語化される場合(8)と全く言語化されない場合(9)があることがわかった。

- (8) Langdon eyed the headset, which was nothing but a sleek loop of metal with tiny pads at each end. **Perhaps seeing his puzzled look,** the young woman came around to help him.

(Origin)

ラングドンはヘッドセットを観察した。それは優美な曲線を描く金属のバンドで、両端に小さなパッドがついているだけだ。困った顔に気づいたらしく、受付係が手伝いにきた。

『オリジン』

- (9) As she barmaid refilled the thugs' glasses, she watched in the mirror as the officer touched a few keys on his phone and then held it to his ear. **The call went through,** and he spoke in rapid Spanish.

(Origin)

バーテンダーはグラスを満たしながら、鏡で様子を見ていた。将校が画面のボタンに二、三度ふれてから携帯電話を耳にあてる。相手とつながったらしく、早口のスペイン語で言った。

『オリジン』

この現象を物語論における焦点化の観点から考察し、日本語は登場人物の視点から状況を捉える傾向(「内的焦点化」)が強いのに対して、英語では語り手の視点から状況を捉える傾向(「ゼロ焦点化」)が強いことを示した。このことから、証拠性の認識的判断には池上(2016)が指摘する「主観的把握」が反映されており、「客観的把握」を好む英語では意識されない認識的判断であることを示した。

最後に、③に関して、6章にて、証拠性「らしい」が一人称主語と共起する場合、ミラティブの意味が発生することを指摘し、その意味が発生するメカニズムについて考察した。通言語的に、間接証拠性の標識が一人称代名詞と共起する際にミラティブの意味が発生することが指摘されてはいるが、なぜそのような意味が発生するのかについては取り上げられていない。また、神尾(1991)において証拠性が「情報のなわばり」と関連することが指摘されているが、ここでも間接証拠性と一人称とが共起するときに生じる意味についての考察はなされていない。以下に示すような、証拠性「らしい」が一人称主語と共起する事例がミラティブへ拡張であると捉える。以下の例は、角膜移植後に亡霊のように現れる男を見ているうちに、その男性への気持ちが好意であることに気づいた女性の発話である。

(10) [角膜移植を受けた後に見える目に映る幻の男に恋をしていることに気づく千晶]

(家に帰る千晶)

千晶父：千晶 どうしたんだ？

千晶： .....おとうさん...あたし.....もうだめよ...

千晶父：なにがだめなんだね？

千晶： あたしあの人が好きになってしまったらしいの

千晶父：あの人ってだれだ

千晶： あたしの目にうつる あのマボロシの人よ

『ブラックジャック』

このような証拠性「らしい」と一人称主語との共起は、「新しく発見した自己」を表すという点で、ミラティブへの拡張の一例であり、本論文で示す「発見のサイクル」が証拠性「らしい」に反映されていると仮定すると、ミラティブの意味を獲得する認知プロセスも自然に説明できることを主張した。

本論文で示した研究は、認知言語学的、また言語類型論的の両側面で意義のあるものである。認知言語学では、理論的枠組みの多くが英語の現象を事例として取り上げられてきており、その枠組みが多くの現象に十分適用可能であることを示してきたが、英語にはない言語現象の考察を行う場合、従来の枠組みが十分に援用できないことが予測される。英語にはない文法カ

テゴリーとしての証拠性を取り上げ、認知言語学の理論を踏襲しつつも、若干の修正を含め援用したという点で、認知言語学の理論的枠組みの射程をより広範なものにするとともに、証拠性にも認知言語学の基本的な理論的枠組みが有効であることを示した。また、言語類型論の観点から見ると、証拠性は以下3つの側面の研究が多くなされてきた。

(11)

- |                      |           |
|----------------------|-----------|
| 1. 世界にはどのような証拠性があるのか | 言語類型論の側面  |
| 2. 証拠性がどのような形式で表されるか | 形態・統語論の側面 |
| 3. どのようにして証拠性が発生したのか | 言語変化の側面   |

本論文では、認知言語学の観点から証拠性が使用される動機づけについて、言語変化の側面、物語論を援用した比較言語学的側面、そして、ミラティブへの拡張という側面から考察したという点でこれまでの研究とは一線を画すものである。

# 学位論文審査報告書

2021年2月12日

## 1 論文提出者

金沢大学大学院人間社会環境研究科

専攻 人間社会環境学専攻

氏名 高島 彬

## 2 学位論文題目（外国語の場合は、和訳を付記すること。）

A Cognitive Linguistic Approach to Evidentiality

- A Case of Evidential *-rasi-i* in Japanese -

（証拠性についての認知言語学的考察 —日本語の証拠性「らしい」を例に一）

## 3 審査結果

判定（いずれかに○印） 合格 ・ 不合格

授与学位（いずれかに○印） 博士（社会環境学 文学 ・ 法学 ・ 経済学 ・ 学術）

## 4 学位論文審査委員

委員長 堀田 優子 <sup>⑩</sup>

委員 入江 浩司

委員 高山 知明

委員 新田 哲夫

委員 渋谷 良方

委員 \_\_\_\_\_

（学位論文審査委員全員の審査により判定した。）

## 5 論文審査の結果の要旨

本論文は、日本語の証拠性を示す「らしい」を取り上げ、その言語変化、日本語と英語の証拠性の現れ方の比較、そしてミラティブ的用法 (mirative) への意味拡張という3つの論点について、認知言語学の枠組みを用いて、新たな認知プロセスを提案することで、統一的な説明を試みたものである。ここでいう「証拠性 (evidentiality)」とは、話し手がどのような情報を根拠にその文を述べているかという「情報源」を表す言語的カテゴリーであり、日本語では、証拠性の文法体系は確立していないものの、推論や伝聞を表す文法要素として「ようだ／らしい／そうだ」などがある。そして、現代日本語の「らしい」には、形容詞を構成する接尾辞の用法 (例：彼はとても男らしい [典型]) と証拠性標識の助動詞の用法 (例：どうやら寝ているらしい [推量]；知人の話では、あの店はつぶれたららしい [伝聞]) がある。

これまでの「らしい」に関する先行研究では、証拠性の観点からその意味変化について説明が与えられているものの、その動機づけまでを明らかにしているものはなく、また、日英語の比較対照やミラティブへの意味拡張までの広範な現象について、認知言語学的な観点から、統一的に説明を試みたものはいまだない。さらに、本論文は日本語の文法現象について英語で執筆したものであり、国内外の研究者に広く読まれることで、通言語的研究としても大いに資するものである。

本論文は、7つの章から構成されている。1章の Introduction と7章の Conclusion は除き、まず2章では通言語的な「証拠性」に関する先行研究を概観し、日本語の証拠性のモダリティ表現の1つである「らしい」について、以下の3つの点を明らかにする必要性を示している。

- ① 「らしい」の [典型] から [推論] [伝聞] への言語変化の経路とその動機づけ
- ② 日本語と英語の小説における証拠性の現れ方の比較対照とその差異が生じる理由
- ③ 一人称主語と共起する際に生じる「らしい」のミラティブの意味 (話し手の予想外の気持ちを表す意味) への拡張とその認知的動機づけ

続く3章では、従来の認知言語学の理論を踏襲しながらも、「証拠性」に反映される認知プロセスを新たに提案している。それは、日常生活における「体験」によってその日常的慣習にズレが生じた際に、これまで当然と思っていた世界を改めて捉えなおすことで、自己の概念世界を再構築するプロセスである。こうした、自らの体験に基づいて既存の概念を改変する動的な概念形成のプロセスを「発見のサイクル (The Cycle of Awakening)」と名付け、「証拠性」にはこうした動的な概念形成の過程が反映されていると主張する。

そして4章では、2章で指摘した3つの論点のうち、①の言語変化に関する問題について、通言語的な「証拠性」の文法化と比較して、日本語の「らしい」の言語変化が非常に

特殊なケースであることを示し、この言語変化がどのようにして成立したのかを推定している。この章では、特に証拠性の「らしい」の構造と意味の変化のうち、次の2つの変化についてその動機づけを明らかにしている。1つ目は、名詞につく接尾辞「らしい」が証拠性の標識になる変化である。この変化の要因として、「らしい」の前に名詞を取る構文において、[AはXらしい]という構造が[[AはX]らしい]というように異分析が生じたとし、その異分析を動機づけるのが、「知識」としての情報を表していたものが、「体験」に基づいて対象をカテゴリー化する判断の作用へと変化することにあるとしている。例えば、「若者らしい意見」という場合、接尾辞「らしい」は「若者」の一般的な典型的属性を表すという点で、多くの人にとってアクセス可能な「知識」寄りの情報を表しているといえる。その一方、「奥から神主らしい男が出て来た」の場合には、実際には神主かどうか分からない対象から話し手（認知主体）が「神主らしさ」を感じ、「[その男は神主]らしい」と推論しているため、個人的な体験に依拠した「体験」寄りの情報であると主張する。2つ目に取り上げる変化は、証拠性「らしい」の「推量」から「伝聞」への意味の変化である。本論文では、（前接部に定形節を取る）「推量」から「伝聞」の意味が生じたのは、発話内容に、話し手とは異なる「判断者（つまり概念化者）」が発生することによるものであると考える。つまり、話し手の発話する表現から、聞き手は、[話し手は[他者が[命題内容]を認識している]ことを認識している]という階層構造を読み取ることになる。接尾辞レベルから証拠性の「推量」への変化は、典型性という確立した「情報」から「体験」に基づく話し手の判断への変化であったが、ここでも話し手が「他者」から得た情報の「判断者」として改めて概念化されることが言語変化の要因になっていると捉え、証拠性「らしい」の言語変化では、発話内容に反映される概念化者の数が増える方向へと変化していると主張している。さらに、こうした証拠性の発生を、3章で提案した、人間の動的な概念構築の認知モデルを用いて、認知言語学の理論においても説明を与えている。この4章は、全体の分量から言っても三分の一を占め、本論文の核心部分と言ってよい。

次に、5章では、2章で指摘した3つの論点のうち、②の日本語と英語の証拠性の現れ方について、4つの小説（英語の原書（日本語翻訳）が2つ、日本語の原書（英語翻訳）が2つ）を基に、「らしい」が現れる文章とそれに対応する英語表現を抽出する形で調査し、次のような主張がなされている。日本語で、「らしい」によって証拠性を有標化する状況において、英語では、動詞や副詞などの語彙的要素を用いて証拠性を表している場合が多いものの、その一方で、全く言語化されない場合も一定数見られた。（例：The call went through. 「相手とつながったらしく…。」）こうした現象を物語論（narratology）における焦点化の観点から考察し、日本語の場合は登場人物の視点から状況をとらえる傾向が強いのにに対して、英語では語り手の視点から状況を捉える傾向が強いことを指摘した。そして、証拠性が表す認識的判断は、日本語で好まれる事態把握の仕方、つまり場面の中から体験的に事態を捉える「主観的把握」を反映しており、場面外から俯瞰的に事態を捉

える「客観的把握」を好む英語では、日本語と違って、表現されない認識的判断があると主張している。

6章では、2章で指摘した③の「らしい」の証拠性 (evidentiality) からミラティブィティ (mirativity) への意味拡張を取り上げる。(例：オレはこの男によっぽど嫌われているらしい。) 通言語的に、間接証拠性の標識が一人称と共起するときに話し手の発見や驚きを示すミラティブの意味が発生することは指摘されていたが、なぜその意味が発生するのかについては十分な説明が与えられてこなかった。この点について、本論文では、アフォーダンス理論を取り入れ、驚きや発見という体験が引き金となって「概念化する自己」が「直接知覚される自己」として再構築されると捉え、3章で提案した「発見のサイクル」の認知プロセスが、証拠性への意味変化の場合と同様、ミラティブの意味を獲得する上でも反映されていると結論付けている。

本審査委員会では、本論文の核心部分である4章で述べられている「らしい」の言語変化について、その意味的、統語的プロセスを認知言語学の観点から明示的に説明している点が高く評価された。その一方で、5章の日英比較については、調査対象が4つの小説の原書と翻訳であるため、量的には十分とは言えず、また書き言葉に限定されている点でも、本論の主張を十分裏付けているとは言えないのではないかという指摘があった。また、6章のミラティブへの拡張については、取り上げている例が限定的であり、前提となっている意味変化自体、「らしい」の中では確立した変化とは言い難い不安定さが残っているという指摘があり、本論文で提案されたモデルの中でその不安定さにどう説明を与えていくのが課題となる。しかし、こうした問題点は、本論文のすぐれた研究成果を損なうものではなく、今後の研究によって克服され、さらなる進展が期待されるところでもある。

以上の審査結果に基づき、審査委員一同は、本論文が博士 (文学) の学位の水準に十分達していると認め、合格と判定した。